

# テレビ開放区

幻の『ぎんざNOW!』伝説

Katou Yoshihiko  
加藤義彦

論創社

## はじめに

録画した映像がほとんど残っておらず、回顧した書籍も作られたことがない。一九七二年に放送が始まったTBS制作の『ぎんぎNOW!』は、今や〈幻のテレビ番組〉と言っている。そのうえ一般的な知名度も、きわめて低い。番組を視聴できた地域が関東に限られ、しかも平日の夕方にひっそりと生放送されたからだ。

この知られざる番組は実に七年間も放送されたが、長く続いたのには理由がある。そのころのテレビ界には珍しく、新人のアイドルやバンド、そして一般学生に進んで出演の機会を提供し、若者の〈開放区〉として人気を集めたからである。

そのころ中学生だった私も、この自由な雰囲気満ちあふれた番組のとりこになった。放送を見るたびにテレビ界への憧れは募り、大学を卒業すると広告代理店に入社。仕事を通じて都内の各テレビ局と関わりを持ち、その裏側を知った。

同じように『ぎんぎNOW!』と出会って人生が変わった人は多い。今も活躍しているタレントの関根勤、小堺一機、清水アキラらも、この番組への出演がきっかけで芸能界に

入った。それから当時は、欧米で誕生した「ロック」という音楽が日本に根づく前で、その種のバンドがテレビ番組に呼ばれることは無きに等しかった。ところがこの番組には、矢沢永吉のいたキャロルや、今も現役のサザンオールスターズほか、若くて血気さかんなロックバンドがデビュー直後から数多く出演し、人気を得るきっかけをつかんだ。それは来日した海外のバンドも同じで、全世界で売れる前のクイーンやヴァン・ヘイレンもスタジオにやって来て、テレビを通して新たなファンを増やした。

一九七〇年代に登場したアイドルやバンドのほとんどが、その新人時代に歌や演奏を披露した『ぎんぎNOW!』。その七年にわたる歴史と舞台裏を、初めて描いたのが本書である。

その内容だが、まず1章では番組を代表する人気コーナーで、多くの学生が出演を機にタレントになった「しろうとコメディアン道場」を取り上げた。続く2章では番組の成り立ちに注目。3章では、海外のロックバンドや歌手が多数出演した「ポップティーンポプス」に迫り、次の4章は、同コーナーで一緒に歌った沢田研二とデュー・パープルのイアン・ギランの共演秘話を探った。

さらに5章では日本のロックバンド、6章では新人アイドルの悪戦苦闘に焦点を当て、7章では一般学生が主役を務めたコーナーの数々と、中高校生の視聴者で結成された「NOW特派員クラブ」の活躍を浮き彫りにした。そして最後の8章では、番組が幕を下ろす

までの歩みをたどり、『ぎんぎNOW!』がその後のテレビ界に与えた影響を考えてみた。それから巻末には、番組に関する放送データを、可能なかぎり調べ上げて載せた。当時学生だった世代は、出演者の顔ぶれをながめるだけで、懐かしさがこみ上げるだろう。

番組が生み出していた、誰でもテレビに出演できて、そこで自分を表現できると感じさせる自由な雰囲気。そうした感触は、今や日々の生活にすっかり根づいた、動画投稿サイトやSNSに代表されるインターネットの世界に接する時のそれに、きわめて近い。では『ぎんぎNOW!』とはどんな番組だったのか、さっそく掘り下げることにしよう。

はじめに ii

第1章 有名芸人を数多く輩出——「しろうとコメディアン道場」——

初代チャンピオンは関根勤／得意のプロレス物まねで勝負／優勝したら、いきなり月曜日にレギュラー出演／常識破りだった「コメディアン道場」／新鮮に映った「素人の笑い」／笑いのチャンピオンが続々と誕生！／10代の女の子に絶大な人気があった鈴木末吉／ブルース・リーに熱狂した清水アキラ／ザ・ハングラスがコントを演じた「NOW爆笑スペシャル！」／物まね版「想い出の渚」が特大ヒット／結成5年目でグループ解散／いきなり芸能界に飛びこんで苦労した関根勤／落語家に転じた花より団子、和田アキ子の物まねで売れたハマッコ吉村／小堺一機、竹中直人、柳沢慎吾／とんねるずの石橋貴明、たけし軍団のラッシュャー板前／物まねを極めた丸山おさむ、小説家になった松野大介／芸能界に進まなかったチャンピオンたち／俳優に転身、日本料理店を経営／応募者も減り、ついにコーナーが終わる

第2章 世にも珍しい「レストランスタジオ」から生放送

三越とTBSが共同で作ったスタジオ「銀座テレサ」／1972年10月2日、ついに番組が始まった！／異端の司会者せんだみつお／当初は「歌」に力を入れた音楽番組だった／外部制作バラエティー番組の先

駆け／時間拡大を機に、曜日ごとに特色を出した

### 第3章

## 洋楽ビデオと来日ミュージシャンの生出演

普及前だった洋楽の新曲ビデオを連日放送／師弟関係から生まれた「東京音楽祭」との連携／番組独自の音楽賞とオリコンの「シャチャョー！」／クイーン生出演！フレディはハンバーガーをねだった／二度目の来日で「ナーウ・コマーシャル！」／出演映像を持ち帰った女性ロッカーのスージー・クアトロ／来日ミュージシャンが毎回出演した「ポップティーンポップス」／進行役のサム&ミキは愉快な名コンビ／ローラズ旋風とアイドルロックの大流行／欧米の音楽情報をいち早く伝えたカズ宇都宮／パンクロック上陸！下着姿で歌った女性バンドのザ・ランナウェイズ／コンサートは不入りでも不満を言わなかったブルンディー／ロックバンドが秘密の地下通路から脱出

### 第4章

## ジョン・レノンは『ぎんぎんNOW!』を見たか

イアン・ギランと沢田研二、二大スター夢の共演！／歌詞を間違えた？イアン・ギラン／二人の熱唱をジョン・レノンがテレビで見ていた？／宿泊先でジョン・レノンと鉢合わせ／ロックバンドのキッスに化けて登場した謎の男／惜しまれつつ「ポップティーンポップス」終了／人気絶頂だったA&B Aの生出演と、英語が上手な進行役のCOPPE

## 日本のロックバンドが続々と出演

元祖不良バンド！ 矢沢永吉率いるキャロルがレギュラー出演／楽屋に立ちこめた、髪につけたポマードの匂い／『紅白』出演！ ダウン・タウン・ブギウギ・バンドの快進撃／本番当日に番組スタッフともめた、館ひろしがいたクールス／ツッパリ上等！ 「武道館、満杯！」と宣言した横浜銀蠅／サザンオールスターズが『ぎんぎNOW！』でテレビ初出演／アルフィー、甲斐バンド、紫、憂歌団／素人バンドコンテストと、番組出演が学校にバテて髪を切った木根尚登／ロックンロールで魅了した素人時代のラッツ&スター／グループサウンズから派生したハリマオと「ヤング・イン・テレサ」／演奏中に一回転！ 「風車ギター」にびっくり／観客から「帰れ！ 帰れ！」の大合唱／洋楽志向のアイドルバンド、レイジー見参！／楽しさと毒を併せ持った近田春夫とハルヲフォン／番組用に演出を工夫した新曲「恋のTPO」／『ぎんぎNOW！』が縁でラジオDJに初挑戦

## アイドル！アイドル！アイドル！

アイドル誕生！ 番組から芸能界入りした青木美冴／高く澄んだ歌声が素敵だった讃岐裕子／大人びていた4代目チャンピオンの朝田卓樹／番組が生んだ最大のスター清水健太郎／男とは？ 菅原文太や矢沢永吉と語り合う／番組とのつながりから生まれた楽曲／山口百恵、フィンガー5、池上季実子、浅野ゆう子／笑いも取ったずうとるびと、あのねのね／太田裕美、榊原郁恵、大場久美子は番組の「三人娘」／出演歌手はどのように選ばれたのか／出演するたびに女性ファンが殺到した郷ひろみ／コンテスト企画で落とされた新人時代のユーミン／初出演と同時にバンドが解散した矢野顕子

## 番組に参加した一般学生たちこそ真の「主役」

10代が恋の悩みを打ち明ける「ラブラブ専科」／等身大の10代に迫った「ヤング白書」／新企画「ザ・青春」と映画監督の塚本晋也／F1レーサーの鈴木亜久里も少年時代に出演／番組視聴者で組織されたNOW特派員クラブ／アメリカ、シンガポールほか4回も行なわれた海外取材／武田鉄矢、楳図かずおも取材を受けた会報『TOMO』／難しかったNTCと学生生活の両立／テレビ局員、放送作家、女優。会員たちがその後に進んだ道

## 番組の終わりと後世のテレビ界に残したもの

総合司会者の交代、せんだの番組離脱／放送7年目で迎えた最終回／スタジオアルタの建設と、スタッフたちの会社設立／『ぎんぎNOW!』でテレビマン人生を始めた映画監督の堤幸彦／アシスタントディレクターはつらいよ／拍手三原則で「前説」の名人に／AKBプロデューサーの秋元康も放送作家として参加／秋元と堤が裏方として支えた、とんねるずが大ブレイク／銀座分室の廃止、その後の銀座テレサ

## おわりに 266

参考文献 270

『ぎんぎNOW!』放送データ

274

『ぎんぎNOW!』主な出演者

294



第1章 有名芸人を数多く輩出——「しろうとコメディアン道場」

## 初代チャンピオンは関根勤

1972年10月からTBSで7年間放送された『ぎんぎNOW!』には、多くの伝説がある。特に有名なのは、タレントの関根勤、清水アキラ、小堺一機、竹中直人、柳沢慎吾らが素人時代に、「しろうとコメディアン道場」というコーナーに出演して注目されたことがきっかけで、芸能界入りしたことだ。

この番組は視聴者参加型の公開バラエティーで、平日の午後5時より銀座の三越別館2階のスタジオ「銀座テレサ」から生放送されたが、特徴的なのは、出演者と観客のほとんどが10代だったことである。さらに制作スタッフも20代と若く、番組が毎日発信する情報はどれも新鮮かつ刺激的で、筆者を含めた関東に住む中高校生の多くが、学校から帰るとテレビにかじりついた。

番組の内容は曜日ごとに異なった。毎週月曜日は「笑い」に力を入れ、74年の7月から始まった新コーナーが「しろうとコメディアン道場」である（以下「コメ道」と略す）。

ネタを披露する若者たちを審査した顔ぶれは、みんな「笑い」に精通していた。NHK『お笑いオンステージ』<sup>\*1</sup>などでコントを量産中だったコメディイ作家の前川宏司、人気絶頂だったTBS『8時だヨ！全員集合』<sup>\*2</sup>の古谷昭網プロデューサー、萩本欽一&坂上二郎

\*1 72〜82年放送。三波伸介、中村メイコ主演の人情コメディイ。

\*2 69〜85年放送。ザ・ドリフターズ主演の公開生番組で、「カラスの勝手でしょ」ほか多くの流行語を生んだ。最高視聴率50・5パーセント。



出場者が登場する門の前で盛り上がる司会のせんだみつお(中央)とザ・ハンダース。

のコント55号<sup>\*3</sup>が所属した浅井企画社長の浅井良二、朝日放送『てなもんや三度笠』<sup>\*4</sup>を演出した澤田隆治、コント55号に師事したコメディアン<sup>\*</sup>の車だん吉などである。それから「コマ道」開始時のTBS側の総合プロデューサーだった青柳脩も、「喜劇」には縁が深い。

映画監督だった父の青柳信雄は、東宝で『サザエさん』<sup>\*5</sup>シリーズなどのコメディ映画を数多く撮った人物で、自身もそれまでに『ブレンダ・リー・ショー』<sup>\*6</sup>『植木等ショー』<sup>\*7</sup>ほか数々の音楽バラエティーを演出していたのだ。

「コマ道」は多くの芸人、コメディアンを輩出したが、青柳プロデューサーに取材すると、当初は「お笑い芸人の登竜門」という位置づけではなく、学校のクラスにいる面白い子供たちに、活躍の場を与えてあげたいと思っていたという。だが大学生だった関根勤が初代チャンピオンとなり、直後に芸能界入りしたこと

\*3 66年結成。激しく動き回る、不条理なコントで一世を風靡。

\*4 62〜68年放送。藤田まこと、白木みのる主演の時代劇コメディ。関西での最高視聴率は64パーセント。

\*5 56年から5年間で10本を制作。江利チエミ主演。

\*6 65年7月放送。米国の人気女性歌手を迎えた音楽番組。弘田三枝子、大橋巨泉共演。

\*7 67年放送。クレイジーキャッツの植木とゲストが歌とコントで競演。

で、プロの芸人になることを夢見る学生の応募が一気に増えたそうだ。その関根勤に所属事務所の一室で話を聞いた。

関根は東京生まれで、中学2年で物まねを始め、友人たちが笑ってくれるのがうれしくて、どんどんネタを増やしていった。「ぼくはテレビっ子だったから、番組やCMで好きな人を見つけると、ずーっと観察するんです。すると、いつの間にかその人の特徴が体に染みこんできたんですよ」。日大法学部に進むと、お笑いの好きな仲間四人と「目黒五人衆」を結成し、都内でライブ活動を始めた。だが大学3年になると、それぞれが卒業後の進路を考え始めたために、グループはその年の夏休みに解散してしまう。「解散したら心にポツカリと穴が開いてしまったので、青春の思い出を作りたくて、前から好きで見ている「しろろ」とコメディアン道場」にハガキを書いて応募しました。それに長いこと趣味でやっていた自分の芸が、どのくらい通用するか試したい気持ちもあったし」。

オーディションは旧TBSの別館で行なわれた。関根は審査を務める番組スタッフたちの前で、もっとも自信のあった「プロレス中継」のネタを披露した。「いろいろやりましたよ。アントニオ猪木さんや、ジャイアント馬場対フリッツ・フォン・エリックとか、一人二役で動きもまねしながら。子供のころからプロレスが大好きでしたからね。ほかにも小ネタの物まねを夢中でいくつかやって、終わってみたら40分も経っていました。あとでスタッフから聞いた話だと、ぼくがネタをたくさん持っていたことに驚いて、それ以降

「コメディアン道場」を勝ち抜き形式に変えたいらしいです」。それまでは毎回、素人学生が三人登場してネタを競い、その中からチャンピオンを決めて終わりだったが、そのルールを変えてしまうほど、関根の出現は番組スタッフにとって衝撃だったのだ。

## 得意のプロレス物まねで勝負

そして本番当日を迎えたが、関根は緊張しなかった。「ぼくにすれば趣味の発表会みたいなもので、気楽な感じだったから。月曜レギュラーだったずうとるびの四人が、いつも客席の最前列に座っていて、ぼくがネタをやると、すごく笑ってくれたなあ。観客のウケがいいと、こちらも気持ちがいいし、乗ってくるんですよ」。「コメ道」には一人あたり2分という時間制限があった。「その中にネタが収まるように前もって時間を計って、自分で一生懸命ネタを作りましたけど、4週目に「プロレス中継」をやった時は、つい長めにやってしまった。そのせいで、番組の最後にあった新人の女の子の歌が飛んじやった（笑）」。見事に5週勝ち抜いてチャンピオンに輝いたが、関根が5週間に物まねを披露した有名人は二十名余り。その中にはその後、彼の十八番になった、プロレスのジャイアント馬場やアクシオン俳優の千葉真一も含まれていた。「その時に披露した俳優の片岡千恵蔵さん、上田吉二郎さん、歌手の淡谷のり子さんの物まねは、プロの芸人さんがすでに



番組関連イベントで司会を務める関根勲(中央)。1975年8月30日に銀座テレサで開かれた「NOW特派員クラブ」発足式にて。

やっていましたけど、馬場さん、千葉さん、アントニオ猪木さん、水森亜土さん、ドラマ『サインはV<sup>\*8</sup>』に出演した際の中山仁さんあたりは、ぼくが最初に物まねをしたと思います。千葉さんなんか、未だにほかに物まねする芸人がいないし」。

当時の青年は長髪にジーンズが多かったが、関根の髪は短い七三分け、服装はアイビート、お坊ちゃま風で清潔感があった。「アイビーの流行はかなり前に終わっていたと思いますけど、普段からぼくはそういう感じでした。『ぎんぎNOW!』で生まれて初めてテレビに出るからといって、特に服装も髪形も変えませんでしたね」。順調に勝ち抜いて、運命の5週目を迎えた。「最後だから特に自信のあるネタを次々にやったんだけど、この時に強力なライバルが登場しました。素人時代の清水アキラくんが初挑戦して、しかもネタがすごく面白い。これは負けたなと思ったけど、勝つことができた。番組スタッフにもスタジオのお客さんにも、「果たして関根はチャンピオンになれるか? なってほしい!」というムードがあって、それが後押ししてくれて勝ち抜けた感じでした。あの時は達成感がありましたよ」。

直後に、浅井企画の浅井良二社長から声をかけられた。「社長は「コメディアン道場」

\* 8 69〜70年/TBS。  
バレーボールに情熱を注ぐ  
ヒロインを岡田可愛が熱演。  
中山仁は彼女を厳しく鍛える  
コーチ役。平均視聴率33  
パーセント。

の審査員の一人で、ぼくの時は3週目から審査してくれましたけど、素人のぼくに厳しいことを言うんですよ。先週よりネタがよくないねって（笑）。浅井はネタを見ている最中もめったに笑わず、審査員の中でも特に辛口だったが、それは「笑い」に対していつも真剣に向き合っていることの証でもあった。「チャンピオンになってすぐに、月曜担当の吉村（隆一）プロデューサーから言われて喫茶店に行ったら、その浅井社長と、のちに浅井企画の専務になった川岸さんがいました。すると社長が、芸能界でやっていく気はないのかって聞くので、ぼくは父の跡を継いで消防士になるつもりだったから、「ありません。ぼくみたいな、単なるクラスの人気者が通用する世界ではないと思いますから」と正直に答えたら、コント55号を育てたぼくが、君の才能を保証するよ、と言うんです。ぼくの中で55号は神様だったから、大学を卒業するまでの1年半だけ、浅井企画のお世話になることにしたんですね。結局、今日までずっとお世話になっているわけですけど」。浅井の「ぼくがコント55号を育てた」というひと言は、相手を説得する際の殺し文句だったらしいが、「コメ道」に出たことで関根の未来は劇的に変わったのだった。

## 優勝したら、いきなり月曜日にレギュラー出演

関根が「コメ道」で演じた主な物まねは俳優の千葉真一、田村正和、上田吉二郎、片岡

千恵蔵、小池朝雄、中山仁、レスラーのジャイアント馬場、アントニオ猪木、落語家の林家三平（先代）、歌手の淡谷のり子、絵描きの水森亜土、アイドルの桜田淳子、安西マリア。プロの物まね芸人が取り上げていなかった人物が多いのが目新しく、物まねの羅列に終わらず、「プロレス中継」などの状況を設定してネタを作りこんだ点も素人離れしていた。

小池朝雄の声まねは、彼が吹きかえを担当してNHKで放送中だった、米国ドラマ『刑事コロンボ\*』が元ネタである。これに象徴されるように、奇しくもわが国でテレビ放送が始まった53年に生まれた関根の物まねは、テレビ番組から触発されたものばかりだった。「コメ道」が放送された70年代にはインターネットもなく、世の青少年少女にとって、地上波テレビが娯楽の王様だった。彼らの目には、関根が「自分と同じようにテレビが大好きな年上のお兄さん」と映り、大いに親しみを抱いたのである。

関根は74年の暮れに「コメ道」の初代チャンピオンに輝き、翌週から『ぎんぎNO W!』に毎週出演するようになった。初体験の司会進行役に戸惑う日々が続いたが、スタッフも共演者も同世代だったことから彼らとしばしば遊び、交流を深めた。当時30代後半で、スタッフ最年長だった青柳プロデューサーも、仕事には厳しいが、その言葉に関根は「愛」を感じた。「本番中に珍しく時間が余ったのにアドリブで面白いことが言えなくて、放送後に青柳さんから叱られました。でも去り際に「来週もがんばれよ」と励ましてくれたから、部屋を出る時にひと言、「スターになれよ」って言ってくれたんです」。「コメ道」

\*9 日本では72年から放送。主役のコロンボ刑事がしばしば口にする「ウチのかみさんがね」が流行語に。



は、人を笑わせることが好きな若者に対してテレビ界が初めて門戸を開いた、画期的な企画である。ではこのコーナーは、いかにして誕生したのだろうか。

## 常識破りだった「コメディアン道場」

「お笑い芸人の登竜門」のようなテレビ番組はその後、日本テレビ『お笑いスター誕生！』<sup>\*10</sup>（80～86年）、テレビ朝日『ザ・テレビ演芸』<sup>\*11</sup>（81～91年）、NHK『爆笑オンエアバトル』<sup>\*12</sup>（99～10年）など数多く現れたが、その先駆けが「コメ道」である。

だがどの世界でも開拓者には苦勞が多く、「コメ道」も企画の実現までに半年かかった。そのころのテレビ界では「笑いを提供するのにはプロの芸人」というのが常識で、素人が視聴者を笑わせるのは無理だ、と周りが難色を示したのである。「コメ道」を発案した人物は、月曜ディレクターの加納一行だという。月曜プロデューサーを番組の初回から6年間務めた吉村隆一に尋ねると、「加納くんは笑いが好きで、先見の明があった。のちにピンク・レディーがデビューした時も、すぐに声をかけて番組で歌ってもらいましたから」と明かしてくれた。

加納は明治大学在学中に演劇に打ちこみ、60年代半ばからTBSで演出助手として数々の番組制作に加わった。68年には『チータ55号』という公開バラエティーで、人気絶頂だ

\*10 グランプリ獲得者はB&B、おぼんこぼん、こだまひかり、九十九一、とんねるず、アゴ&キンゾー、シテイボーイズほか。

\*11 ダチヨウ倶楽部、B21スペシャル、中村ゆうじ、浅草キッドらが出演を機に注目された。

\*12 若手時代のアンジャツシュ、アンタツチャブル、タカアンドトシ、NON STYLEらが脚光を浴びた。

った芸人コンビ、コント55号の萩本欽一と出会って意気投合。70年にわが国初の番組制作会社、テレビマンユニオンの創立に参加した際にも、萩本を誘ってメンバーに引き入れている。たぶんその縁からなのだろう。『ぎんぎNOW!』にも第21回に萩本がゲスト出演しており、また同時期に加納は、テレビ東京の『私がつくった番組・マイテレビジョン』<sup>\*13</sup>において、クレイジーキャッツの植木等や、彼らの座付き作家だった青島幸男を主役に迎えた回を演出するなど、笑いへの強い興味を感じさせる仕事に携わっている。のちに『ぎんぎNOW!』から離れて、オフィス・トゥー・ワンという制作会社に移っても演出業を続けたが、06年に逝去した。吉村いわく「神経が細やかで、やさしい男」だったという。

その吉村は、なんと『ぎんぎNOW!』がテレビ番組制作初体験<sup>\*14</sup>であった。出身は京都府舞鶴市で、高校卒業後に大阪へ出て芸能事務所に入社。俳優の藤田まこと、野川由美子、入川保則のマネージャーを経て、民音主催のコンサートを制作するユニゾン音楽出版に移った。この会社が『ぎんぎNOW!』月曜日の制作を初回から請け負うことになったが、同社はそれまで番組制作をしたことがなかった。そこで芸能界に顔が広いだろうというところで、吉村に声がかかったのである。

テレビプロデューサー初挑戦だった吉村の頼もしい味方になったのが、月曜日の番組構成を任された前川宏司だ。彼は自ら「コメディイ作家」を名乗るなど、笑いを作ることに情熱を注いだ傑物で、日本テレビ『シャボン玉ホリデー』<sup>\*15</sup>、TBS『8時だヨ!全員集合』

\*13 72〜73年放送。吉永小百合、三波春夫、美輪明宏、キャロルらが出演。

\*14 そのほかの曜日プロデューサーにも「初体験」の人物が数名あり、その前職は映画や音楽のプロデューサーや放送作家などであった。

\*15 ザ・ピーナッツ、クレイジーキャッツ主演のしやれた音楽バラエティー。61〜72年放送。

# 『ぎんぎNOW!』主な出演者

(調査作成／加藤義彦)

(注)出演者の顔ぶれには、ゲストのほかに、レギュラーで出演していた人たちも一部含まれています。人名の表記は当時のものに統一してあります。●印は、放送日が月曜だったことを示しています。( )内は出演した可能性があるゲストです。

放送日	主な出演者	放送日	主な出演者
-----	-------	-----	-------

## 1972年

10月●2	石橋正次、仲雅美、松尾ジーナ、星吉昭、	10	あがた森魚、はしだのりひこ
3	青い三角定規、後藤明、三遊亭夢八、三遊亭笑遊、吉田真由美、クーフィ、星吉昭	●13	小川知子、レッゴー三匹、マリカ&カオリ
4	大和田伸也、山口いづみ、葉山ユリ、星吉昭、今井れい子	14	野口五郎、クーフィー
5	泉谷しげる、生田敬太郎とマックス、ピビ&コット、星吉昭、今井れい子	15	森本英世、山口いづみ
6	フォーリーブス、西城秀樹、福沢良、フレンズ、三遊亭夢八、三遊亭笑遊、吉田真由美、星吉昭、今井れい子	16	杉田二郎、柘植章子
●9	沖雅也、あがた森魚	17	沖雅也、紀比呂子、奈良富士子
10	由美かおる、紅浩二	●20	南沙織、ビリーバンバン
11	小柳ルミ子、伊東きよ子、トムとジェリー	21	ニューキラーズ、牧村三枝子
12	ケメ、ピビ&コット	22	シュークリーム、トワ・エ・モア
13	南沙織、郷ひろみ	23	あがた森魚、三上寛
●16	森田健作	24	郷ひろみ、三善英史
17	平山三紀、三善英史	●27	由美かおる、千葉マリヤ
18	千葉紘子、野口五郎	28	西城秀樹
19	古井戸	29	伊丹幸雄
20	尾崎紀世彦、研ナオコ	30	丸山圭子、龍プラスワン
●23	朱里エイコ、青い三角定規	12月 1	かまやつひろし
24	麻丘めぐみ、青山一也	●4	西城秀樹、野村真樹
25	伊丹幸雄、小林麻美	5	本郷直樹、ウッドベッカー
26	山本コウタロー、かぐや姫	6	葉山ユリ
27	森田健作、本郷直樹	7	本田路津子、チューリップ
●30	萩本欽一、小山ルミ	8	にしきのあきら、千葉マリヤ
31	にしきのあきら、岩淵リリ	●11	湯原昌幸、つなき&みどり、レッゴー三匹
11月 1	南沙織、原美登利	12	野路由紀子
2	ケメ、五輪真弓	13	千葉紘子、あおい健、ZOO
3	クーフィー、後藤明	14	リリィ、杉田二郎
●6	五木ひろし、牧葉ユミ	15	五木ひろし、松尾ジーナ、デニス大城
7	小林麻美、チェリッシュ	●18	城崎ジュン、かまやつひろし
8	西城秀樹、平山三紀	19	あさだひろし
9	山本コウタロー、なぎらけんいち	20	野村真樹、つなき&みどり
		21	沖繩フォーク村
		22	シモンズ、黒崎とかずみ、チューインガム
		●25	ちあきなおみ、大和田伸也
		26	西城秀樹、後藤明、葉山ユリ
		27	西城秀樹、ゴールデンハーフ、小島一慶

## 1973年

1月 4	ケメ、とみたちろう	10	西城秀樹、あおい健
5	後藤明、研ナオコ	11	加藤和彦
●8	井上順、葉山ユリ	12	にしきのあきら、小川知子、牧村三枝子
9	はしだのりひこ、円谷弘之	●15	平山三紀

# 『ぎんぎNOW!』放送データ

(調査作成/加藤義彦)

(注)当番組は残された資料が非常に乏しく、今回わずかに入手できた映像と台本、放送当時の新聞やテレビ雑誌、番組関係者の記憶から情報を集めました。したがって「主な出演者」の一覧表を含め、完全版には程遠いことをご了解ください。なおお人名などの固有名詞の表記は、当時のもので統一しました。

[放送期間] 1972年10月2日～79年9月28日、TBSにて全1781回を放送

[放送時間] 平日17時～17時30分(初回～74年6月28日)。その後、時間変更が次のように行なわれた。

- ・17時～17時40分(74年7月1日～75年10月3日)
- ・17時～17時45分(75年10月6日～76年10月1日)
- ・17時15分～18時(76年10月4日～78年9月29日)
- ・17時30分～18時(78年10月2日～最終回)

## 歴代の総合司会者

せんだみつお(初回～78年9月)、阿部敏郎(78年10月～79年3月)、ラビット関根(79年4～9月)

## 曜日ごとの主なレギュラー出演者

月曜/キャシー中島、ジェミニネス、荻野順子、西島明彦、ラビット関根、鈴木末吉、榊原郁恵/フィンガー5、ずうとるび、あのねのね、アンデルセン、吉川桂子、ザ・ハンダース、トライアングル、西村まゆこ、ファイアー、桑江知子

火曜/キャシー中島、ジェミニネス、荻野順子、西島明彦、平鉄平、池上季美子、佐藤金造、讃岐裕子、松宮一彦/長谷直美、ドゥーTドール、マギーミネコ、シェリー、小清水勇、水野三紀、JJS、草川佑馬、近田春夫、清水アキラ、アパッチけん、荒川務、星正人、リトルギャング、高見知佳、大場久美子、大橋惠理子、天馬ルミ子

水曜/キャシー中島、ジェミニネス、荻野順子、西島明彦、太田裕美、桂枝八、吉村明宏、小堺一機/恵おさみ、海老名みどり、チャコ&ヘルスエンジェル、フレンズ、牧ひとみ、ダウンタウン・ブギウギ・バンド、三木聖子、池田ひろ子、五十嵐夕紀、横山エミー、久我直子、三輪車、Char、レイラ

木曜/キャシー中島、ジェミニネス、荻野順子、西島明彦、平鉄平、松岡ひろみ、川口厚、金子由紀江、松田かんな、ラビット関根、小清水勇、水野三紀、田島真吾/キャロル、ローズマリー、ハリマオ、弾ともや、豊川 誠、金子由紀江、清水健太郎、松岡憲治、アップルズ、MMP、ポップティーンガールズ、三色すみれ、ダンディーII、シルクロード、秋ひとみ、高取千恵子

金曜/キャシー中島、ジェミニネス、荻野順子、西島明彦、黒木真由美、坂上大樹、北村優子、吉村明宏/フレンズ、福沢良、浅野ゆう子、西崎みどり、池田美彦、

ちゃんちゃこ、レモンパイ、ボビー&リトルマギー、鬼沢慶一、讃岐裕子、坂主昭市、香坂みゆき、レイジー、コッペ、早川由貴、倉田まり子

## 曜日ごとの主なコーナー

月曜/しろうとコメディアン道場(74年7月～78年9月)、NOW爆笑スペシャル(76年9月～78年6月)、せんだみつおのワンパターン学園(78年8～9月)、恋の三銃士(78年10月～)、NOWドッキングラブ(79年6～9月)

火曜/ヤングコンテスト(73年)、みんなで選ぶ明日のスター(73年10月～)、スターへのパスポート(74年7月～)、学校対抗バカウケ大合戦、うわさのスター気になる瞬間、挑戦・謎の世界(いずれも75年10月～)、ぎんぎマガジン(76年)、らいぶすぽっと4丁目(76年7月～)、NOW特捜班(76年)、あきらとケンコの笑いのページ(76年10月～)、フォーク&ロックコンテスト(77年7月～)、私はNo.1(78年)、俺は体力No.1、ザ・リングショー、激突!タコチャー(いずれも79年)

水曜/デート・イン・テレサ(73年)、学校新聞紹介(74年2月～)、俺にも言わせろ(74年3月～)、ラブラブ専科(74年7月～77年3月)、お見合い大会(75年6月～)、愛の告白3分間(75年9月～)、NOW残酷快感アクション(77年1月～)、シンデレラのラブサンド(77年3月～)、ギックリシャッキリLoveLoveアタック(77年10月～)

木曜/フォークテレサ(73年)、モグラゲーム・コンテスト(74年3月～)、キャンパス自慢大会(74年7月～)、ヤングフォークコンテスト(74年～)、シンガーソングコンテスト(75年4月～)、男の聖書、男の美学(75年7月～76年11月)、勝ち抜き腕相撲(76年1月～)、ポップティーンポップス(76年11月～78年9月)、スクールクイズチャレンジNOW(78年10月～)

[著者経歴]

## 加藤義彦 (かとうよしひこ)

1960年、東京浅草生まれ。大学を卒業後、広告代理店勤務を経てフリーライターに。テレビ番組とお笑いに関しては新旧を問わず精通し、雑誌を中心に寄稿を続けている。主な著作は、単著『「時間ですよ」を作った男・久世光彦のドラマ世界』（双葉社）、共著『作曲家・渡辺岳夫の肖像』（ブルース・インターアクションズ）、『コミックバンド全員集合!』（ミュージック・マガジン）。また企画構成を手がけた書籍には、山田満郎著『8時だヨ!全員集合の作り方』、居作昌果著『8時だヨ!全員集合伝説』（ともに双葉社）などがある。

(写真提供)

吉崎弘紀 (p3, 6, 13, 20, 37, 71, 197, 205, 220, 225, 229, 230, 233, 237, 247)

朝吹美紀 (p86, 87, 88, 116)

宮下康仁 (p55)

田口治 (p65)

黒沢賢吾 (p162)

商店建築社 (p53の上)

TBS (p61)

※本書で使用した写真の中で一部肖像権・著作権の確認ができなかったものがあります。

お心当たりの方は小社までご連絡ください。

# テレビ開放区

## 幻の『ぎんぎNOW!』伝説

2019年9月20日 初版第1刷印刷

2019年10月2日 初版第1刷発行

著者 —— 加藤義彦

発行者 —— 森下紀夫

発行所 —— 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

tel. 03(3264)5254 fax. 03(3264)5232

振替口座 00160-1-155266 <http://www.ronso.co.jp/>

ブックデザイン —— 奥定泰之

印刷・製本 —— 中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1873-3

©2019 Yoshihiko katou printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。